筑紫女学園大学リポジト

'Archaeology" and "Middle East" as Elements of the Novel Fumon Written by Matsumoto Seicho

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/474

松本清張著『風紋』における「考古学」と「西アジア」

大　津　忠　彦

“Archaeology” and “Middle East” as Elements of the Novel *Fumon* Written by Matsumoto Seicho

Tadahiko OHTSU

はじめに

松本清張（1909［明治42］年12月21日～1992［平成４］年８月４日）の長編推理小説のひとつに「風紋」（初出は、原題「流れの結像」として、講談社『現代』創刊号1967［昭和42］年１月号～1968［昭和43］年６月号連載）という「健康食品ブームの内幕を平社員の視点から描いた社会派企業ミステリー[1]」長篇作品がある。「平社員の視点から」とあるのは、物語登場人物のひとり今津章一のつけた「日記みたいな手記」、「ノート」を借りた「私」が、その内幕を「この小説に書いてきた」という物語設定になっているからである。この「私」を具体的に誰某と特定することは「風紋」のストーリー展開だけからは勿論叶わない。しかし、あくまで仮定ながら、著者松本清張自身の可能性も、小説の常套としては考えられなくも無い。

「風紋」は、松本清張の年譜に照らせば、その創作量・ジャンルの多彩さが弥増してきた時期の作品のひとつである。具体的には、「考古学もの三部作」[2]と云えよう「距離の女囚」（1954［昭和29］年３月）、「断碑」（1954［昭和29］年12月）、「石の骨」（1955［昭和30］年１月）などの、いずれも考古学者とその世界を主題とする比較的初期の短編作品発表後相次ぐ「考古学もの」―それは、当初よりこの作家の主要な作品ジャンルのひとつを成していた―の継起線上にあって、松本清張が作家としての活動に専念するようになって10年が経過したころのものである。「風紋」には、後述のごとく、松本清張自身を投影する要素が、いま一度あらためて強調されている、すなわち原点回帰されていると筆者は考えたい。本論では、「風紋」もまた「考古学」に固執し続ける作者自身の要素を作品構成に強く付与していると共に、新たな作品舞台、ジャンルとしての「西アジア」への視座が喧伝されている様態を読解・再考してみたい。

Ⅰ.「風紋」における「考古学」への言及

「風紋」において、「考古学」および関連する事項に言及する該当箇所を作品中より抜粋すると次のようになる（引用文末のカッコ内は『松本清張全集』［文藝春秋、以下『全集』と略す］中の所

収頁および上あるいは下段を表わす）：

① （浅野忠室長は）考古学が趣味で、休日には運動を兼ねてよく古代遺跡を見に出かけた。（6頁下）

② （浅野が今津に話す：）「この前の日曜日には長野県の尖石（とがりいし）の遺跡を見に行って長い間の念願を果しましたよ。いや、もう、信州は縄文文化時代の自然博物館ですなア。あすこは、今津さん、打製石器でもヨーロッパの旧石器時代のそれと……」（15頁上－下）

③ 灯を消した自家用車は依然として黒曜石のようにならんでいた。（22頁下）

④ 室長の浅野は考古学雑誌に眼をさらして、古代世界の三昧境に入っている。彼は、今津が何をしようと、全然無関心だった。（37頁下）

⑤ 浅野は、そんな彼（＝今津、引用者註）の様子に気がつくほどの繊細さはなく、童顔に人のいい微笑を浮べて、自分の好きな考古学のことをしゃべり出した。今津も室長の浅野ということでなく、その人柄に好意を持ってこれまで考古学の話のおつき合いをしていたのだが、今はそれどころではなかった。（39頁上－下）

⑥ 浅野は今津が傍でそわそわしていても悠然たるもので、まだ考古学の雑誌を愉しそうに読みつづけていた。（41頁上）

⑦ 浅野さんがこんなところを歩いておられるとは思いがけなかったと云うと、浅野さんは例の童顔に人のいい笑（え）みを浮べ、ホテルで考古学の先生に会って話を聞いた帰りだと云う。この人は、会社がどう変ろうと、また人事がどんなふうになろうと、趣味の考古学以外は一切興味がないようであった。（44頁下）

⑧ 今津は、午前中、浅野のところに遊びにいった。（中略）浅野の家では、蒐（あつ）めた土器や石器などを見せてもらった。例によって童顔をニコニコさせ、いかにも嬉しそうに次から次へと蒐集品を今津の前に出した。石鏃（いしやじり）も標本のように箱に整理して置いてある。土器の欠片（かけら）も大体編年順に整理してあるが、夫人は、主人がこんなガラクタを蒐めているので置場に困るんですよ、とこぼしていた。（45頁下）

⑨ （浅野が）まだいいじゃありませんか、と云うのを今津はふり切って、玄関で靴をはいた。これ以上考古学の話を聴かされるのはありがた迷惑の気持だった。（46頁下－47頁上）

⑩ 「この次、またゆっくり遊びに来て下さい。今度はもっと珍しいものをお目にかけたいと思いますよ」と、浅野は蒐集品を見せたくてたまらない風だった。しかし、今津は、それほどの趣味も無いし、いわば義理で訪問しただけなので、あれ以上土器や石器を見せられては退屈だと思った。（48頁下－49頁上）

⑪ 十二時になって机の上を片づけると、浅野が考古学雑誌から眼をあげて横から云った。（54頁上）

⑫ 机に戻ると、浅野さんが例によって考古学雑誌を開いていた。（中略）自分（＝今津、引用者註）は机に対（むか）ったが、すぐに社史の資料に眼を通す気にはなれなかった。（中略）浅野さんはそんなことに頓着なく、自分が閑（ひま）だとみたか、最近の発掘について話しはじめた。自分は、ふむ、ふむ、ええ、と上（うわ）の空で返事をしておく。浅野さんはほかに相手になってくれる者がい

ないから自分を唯一の頼りにしている。今日はそれどころではありません、と断わるには忍びないのだ。こんないい人がこの社にいるとは、それだけでも救われる。現在の社会でも数少ない人であろう。(68頁上－下)

⑬ (浅野さんが)考古学の話を打ち切ったのは、今日の自分(＝今津、引用者註)にあまり反応がないと分ったかららしい。(68頁下)

⑭ 今津は、こうなると浅野のほうが自分(＝今津、引用者註)などよりはずっと利口だと思い直した。今まではさっぱり仕事に熱意を持たず、趣味の考古学などに熱中している浅野を内心では軽蔑していたが、今度は見直した。(73頁下)

⑮ 浅野の達観はやはり自分(＝今津、引用者註)よりも年の功だけはあると、俄(にわ)かに尊敬さえしたくなった。その浅野は今日も考古学関係の本を開いている。雑誌だけではなく、学会報告書まで眼を通しているから、もはや、セミプロ級であった。(74頁上)

⑯ それでも、現代のPRは仙人のような浅野さんをおどろかすには十分だった。テレビや新聞の大宣伝にはおどろきましたな、と考古学の話の間に浅野さんは眼をまるくして自分(＝今津、引用者註)に云う。(80頁上)

⑰ ひとりで昼休みの時間を持てあましていたときなので、例によって春風駘蕩(たいとう)たる浅野さんの話に接したくなったのだ。ふしぎなもので、自分の気持が昂揚しているときは考古学の話などどうでもいいが、重い気持に沈んでいると、その話が心を慰めてくれる。(82頁上)

⑱ 今津が仕事をしていると、昼前になって浅野が今津の椅子のうしろを熊のように行ったり来たりしはじめた。浅野は何か話しかけたいときは必ずそんな様子をするので、今津も何を話しかけられるのかと思った。多分、考古学の最近の話題であろう。浅野は今津が忙しがっているので、途中で話しかけるのを遠慮しているのである。(86頁上)

⑲ 「浅野さん、あなたの予感が当りましたね」と、今津はそっと浅野に云った。「いや、ぼくはぼんやりと云ったんですが、悪いことを予言したようですな」と、アマチュア考古学者は屈託なげに笑っていた。(90頁下－91頁上)

⑳ この噂と、浅野がチラリと云ったことが妙に符合した。今津は、考古学にばかり熱中して世俗的なこととは絶縁している浅野が、案外にも鋭い感覚を持っていると感心した。(104頁下)

㉑ 「ところで、君(＝今津、引用者註)のノートには、君の上司でもあり考古学マニアでもある浅野さんの妙な行動がチラチラと出てくるね。(中略)ああいう好人物はどこの会社にもいる。栄誉も出世も諦め、自分の趣味だけを生きる拠(よ)りどころにしている老社員の無関心さが出ているのだが、その浅野さんも案外なところでスパイ的なところをみせているね。(攻略)」(115頁上－下)

すなわち、機械的に頁数(『全集』所収は5～117頁)のみに注目しても、該当箇所は物語のはじまりから終わりまでにわたって頻出して在ることが伺われる。その様態は、作中人物のひとり浅野忠の「趣味」として、この登場人物に関わって「考古学」が登場するのである。浅野は自らが勤務する会社(東方食品株式会社、日本橋)での所属先「社史編纂室」の室長であり、「セミプロ級」

の考古学愛好家、という設定である。そして物語全体は、浅野の部下今津章一から観たこの会社の人間相関ならびに内憂外患を展開させつつ進行し、この諸過程で登場する浅野忠に付帯する形態で「考古学」への言及はそのほとんどが見出される。

Ⅱ.「風紋」の考古学要素における松本清張自身

松本清張の作品において「考古学」がさまざまな形態で登場することについて、筆者はこれまでしばしば指摘してきた[3]。「風紋」もまたその好例のひとつであり、私小説ではないながらも、ここでは考古学を介しての著者松本清張自身がかなり濃密に投影されていると考えられる。「私小説」について、この作者は一家言を持ち、たとえば自伝的小説とされる「半生の記」（1963～1964年初出）所収の「あとがき」等では、次のように旨述べている：

■「私は、自分のことは滅多に小説に書いていない。いわゆる私小説というのは私の体質には合わないのである。そういう素材は仮構の世界につくりかえる。そのほうが、自分の言いたいことや感情が強調されるように思える。それが小説の本道だという気がする。」（「半生の記」（新潮文庫第15刷）所収「あとがき」より）

このことはまた、以下のエッセイからも窺い知ることができる：

■「普通の小説といっても、種々の種類があり、それを一色ときめるのは乱暴だが、大まかに見ればさして間違ってはいまい。たとえばいわゆる純文学だが、そこには文章の難解さを厭わず、いや、それを誇示すらあえてして内容の深遠をうたおうとしているのがあり、身辺些事（しんぺんさじ）を克明（こくめい）に写すことによって人生の断片を切り取って見せようとする私小説（自然主義以来、わが文壇の主流であり、現在もその名残りがある）がある。一は思想がありそうにみえるがいかにも晦渋（かいじゅう）であり、一は身につまされる話だがいかにも単調で随筆と変らないものがある。」（『随筆　黒い手帖』講談社文庫版　８頁）

このことを勘考すれば、前章で引用の「該当箇所」事例⑧は、自身の考古学への傾倒のはじまり、すなわち戦前この作家が小倉の朝日新聞社勤務時代のひとこまとして著すところにかなり符合する：

■「校正係主任のＡさんが考古学に身を入れていて、よくその話を私に聞かしたものだった。（中略）ある日、彼の家に遊びに行くと、考古学関係の高価な本が四畳半だかの押入れに一ぱい積み上げられている。ほかに訪ねてゆく者がないとみえ、Ａさんはいかにもうれしそうに、蒐集（しゅうしゅう）した石器や土器の破片など次々と出して私に見せた。この人の影響から、私は社のいやな空気を逃（のが）れるため、北九州の遺跡をよく歩き回った。小遣（こづかい）をためて京都、奈良を歩いたのもその頃である。北九州には横穴の古墳が多い。一晩泊るのは費用がかかるので大てい日帰りだったが、それでも憂鬱な気分が一日でも忘れられて、どれだけ救いになったか分らない」（「半生の記」第15刷新潮文庫版，79頁）。

これに関連する下記事項[4]は注視すべきであろう：

■朝日新聞社内の松本清張の隣は、広告部校閲係の机だった。主任は浅野隆、考古学が好きで、休みには近くの遺跡などを見て歩くのを楽しみにしていた。お互いに社内では「縁の下の力持ち」、自然と話をするようになった。家を訪ねると、収集した土器の破片などがあった。

すなわち、かつて松本清張の傍らに極めて熱心な考古学愛好家、考古資料蒐集家が居た事実（＝「素材」）が、この作家流に云えば、小説「風紋」という「仮構の世界につくりかえ」られている。しかも実在人物の「浅野隆」に相当する小説中の人物の名前が「浅野忠」とは、そのあまりの類似さに驚きと、さらには作意さえおぼえさせられる。

敢えて推察すれば、「浅野忠」が「この前の日曜日には長野県の尖石（とがりいし）の遺跡を見に行って長い間の念願を果しましたよ。」（引用の「該当箇所」事例②）という件もしかり。松本清張は、昭和28年の暮れから正月にかけて、「浅野隆」を介して強く興味を覚えた考古学者森本六爾（1903年３月２日～1936年１月22日）について調べるために長野県諏訪市を実際に訪れている。この時の体験が、例えば「絵はがきの少女」（1959［昭和34］年１月）や「波の塔」（1959［昭和34］年５月～1960［昭和35］年６月）等々爾後の諸作品に、考古学に関わる語りを敢えて加味しつつ、色濃く反映されている[5]。そして、この時の体験を「わたしは信州の村にあこがれていて、その気持がいまもあとを曳いている[6]」と云わしめているほどである。

また、前章で引用の「該当箇所」事例⑦の、作中人物浅野忠が「考古学の先生に会って話を聞いた」という行動さえも、松本清張の、たとえば「私は国学院の考古学主任教授樋口清之氏にいろいろと話を聞いた[7]」という実際の行動に相附合すると考えられる。

このように、「風紋」は確かに「社会派企業ミステリー」（前出）ながら、松本清張自身の考古学との私的繋がり具合を執拗に織り交ぜている。したがって、前章で引用の「該当箇所」事例③の表現「灯を消した自家用車は依然として黒曜石のようにならんでいた」において、会津章一が高級料亭街で目にする黒塗り高級車の車列を「黒曜石のように」と表現したことも、「北九州の遺跡をよく歩き回った」（「半生の記」）ことから、きっと石器素材に通じていたであろう松本清張ならではと筆者は考えたくもなる。

「黒曜石」を物語展開上において、それも考古学に直接は何のかかわりも無いはずのところに、敢えてを使う表現法は、実は松本清張の他の作品にもある。それは、「風紋」と作品発表年の相近い「与えられた生」（1969年１月）中、日本画家の主人公（桑木）が手術後の療養のため湯河原の温泉地に滞在し、日々の無聊をかこつ場面においてである：

■「旅館に三、四日でもいっしょにいると居場所が狭いだけに懶くて窮屈でやりきれなかった。湯河原の町も川に沿った細い一本道の旅館街で、見る所とてなかった。黒曜石の石鏃が出るという丘に上ってステッキの先で土をほじくってみたりするくらいがせいぜいの気紛れだった。」

Ⅲ.「風紋」以前の西アジア：現地訪問とその作品

「風紋」には、考古学的要素と共に、もうひとつ西アジア的要素が大きく込められていることを筆者は注目したい。松本清張はこの作品発表以前すでに西アジアを四たび、すなわち1964（昭和39）、1965（昭和40）、1973（昭和48）、1978（昭和53）年に訪れ、爾後、彼の地にちなむ小説等を少なからず著わしている。例えば、「ベイルート情報」（1965年６月）、「ペルセポリスから飛鳥へ」（1988年５月）などは、それぞれの題名が示唆するように、西アジアを取り扱った作品である。男女のいわゆる“道行”を描いた長編佳作「砂漠の塩」（1965年９月～1966年11月）はエジプト、レバノン、シリアをその舞台としている。「火の路」（原題「火の回路」、1973年６月～1974年10月）は、史学科助手という設定の主人公が発表する論文題目「飛鳥文化のイラン的要素－とくに斉明紀を中心とする古代史考察と石造遺物について」を考察する内容の、これは「眩人」（1977年２月）においても相呼応する古代文化交流のテーマを強調する展開のうちに、松本清張自身の史観が強く発揮された論文調の小説となっている。古代史ばかりではない。「白と黒の革命」（1979年６～12月）は、発表同年に、作者自身が現地テヘラーンで遭遇した「イラン・イスラーム革命」を取り入れたものであった。

松本清張が西アジアを最初に訪問した時のことは「はじめてのヨーロッパ（一九六四年）」（『作家の手帖』（文藝春秋1981年）所収、初出は『旅』1964年７～９月号）にたどることができる。それによれば1964（昭和39）年４月27日にローマからカイロに入り、５月１日にベイルートを離れ帰国の途に就くまでの１週間ほどが西アジア滞在であり、期間中、ピラミッド、「死の町」等々のカイロ周辺、さらにはレバノンのバールベック遺跡（著者の表記は「バーベック」）を訪れていることがわかる。この時の体験はほとんどそのまま「ベイルート情報」（1965年６月）に小説化されている。旅行中悩まされた歯痛を、「このときの経験をのちに「ベイルート情報で使った」（『作家の手帖』259頁、注27）ほどである。

また、「はじめてのヨーロッパ（一九六四年）」本文中に「Ｓ氏」、「四十くらいの快活な人。エジプトの考古学では権威者」と著された鈴木八司（1926～2010年）による論文「古代エジプトのいわゆる鳥船について[8]」の副題は「松本清張氏との約束に応えて」とある通り、これは「1971年初夏、松本清張氏からの一つの質問」（前記）に対する回答ということになっている。自らの疑問を臆せず専門家に直接向ける松本清張の具体的研究心のたかまり、旺盛さをこれからも窺い知ることもできる。

「風紋」発表以前に限れば、翌1965（昭和40）年が第二回目の西アジア（中近東）行であり、これは「砂漠の塩」の取材旅行であったといわれている。「はじめてのヨーロッパ」ように、日誌風に取りまとめた著作物を筆者は未だ知り得ないが、それでも例えば「瑠璃碗記」（『太陽』1966年７月）、「クレオソートと玉碗―正倉院とイランの古美術店―」（『週刊文春』1977年１月６日新年特大号）などに足跡の要所をたどることができる。

Ⅳ.「砂漠の港」、「砂漠の渚」

初回および第２回目の西アジア訪問は、「風紋」発表前における松本清張の砂漠実体験であり、その小説作品化の諸事に関しては考察要素として惹かれるところ大ながら、敢えてここでは作者の大枠的観察眼のひとつを捉えておきたい。それは「ベイルート情報」における主人公「私（井上）」の感興として著わされている事である。主人公は「一九六四年の秋のはじめ」のヨーロッパ旅行中、ローマで同行者一行と別れると、「ひとりでカイロに向かった」。主人公は「十日ばかりをかねて希望の中近東の見物に当てたい」予定から、「エジプト、レバノン、シリア、ヨルダン、イラク、イランなどのビザも取っておいた」。そして陸路ダマスカスに到着する（生憎、歯痛を抱えているという物語設定）。：

■その晩は、またお粥（ポリッジ）で辛抱した。飯を食って、ぶらぶらと外に出た。ダマスカスの気候は、山地のせいか、日本よりはかえって冷たく感じられる。夜目にも高い樹が街の到る所に聳えていた。ダマスカスは、誰やらが書いたように、「砂漠の港」である。（文春文庫版1977年第２刷版、214～215頁）

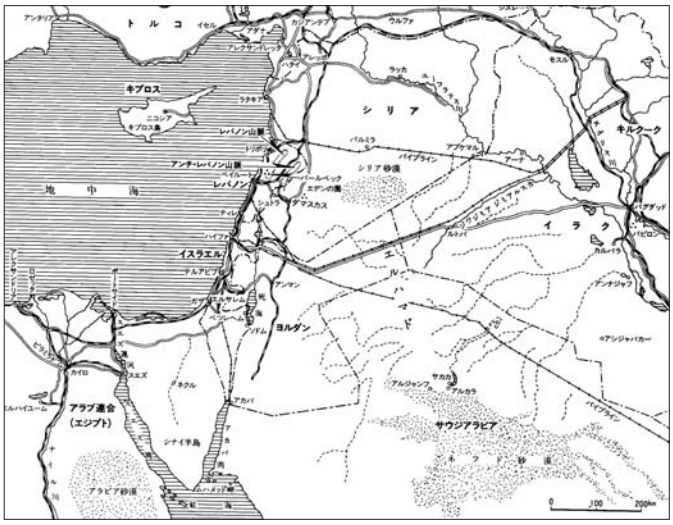

図１．本論の西アジア（中近東）舞台
（「砂漠の塩」挿図より一部改変）

この「誰やら」とは誰の意か？それは次作「砂漠の塩」において明文化される：

■彼女はスーツケースの中から本を取り出して開いた《飛行機の上から眺めるとダマスカスが港―海の港ではなく砂漠の港―であるという重大なことがわかる。空から眺めると、緑のオアシスの中にあるその白い町が、山の傾斜面から黄褐色の砂漠に突き出ているように見える。これに比較できるような砂漠の港は、山脈の東にも、海岸平野にも見られない。（後略）》（「砂漠の塩」、新潮文庫初版、110頁）

すなわちＪ．ハックスレー『飢えと光り』[9]の該当箇所を意味する。これらは砂漠の地勢を陸地における大海原に擬えて、砂漠に接して位置する様態から「砂漠の渚」という表現を執っている：

■この部屋のテラスからでもピラミッドの小さな頂上だけが街の端の上にのぞいていた。そこは砂漠の渚（なぎさ）であった。（同前、54頁）

■ダマスカス。（中略）シルクロードの宿駅であり、メッカに行く関門でもあった。それから巨

大な砂漠の渚(なぎさ)にもなっている。（同前95頁）

V.「キャメル・ソーン」

「風紋」において西アジアを具体的に構成している要素のさらにひとつは「キャメル・ソーン」という植物である。乾燥地植生の専門家に拠れば、このキャメル・ソーン（Camel thorn あるいは Camelthorn）には２種類（あるいはそれ以上）あり、いずれもマメ科の木本で、ひとつは *Alhagi* 属の低木、いまひとつは *Acacia* 属の高木である。

「風紋」に言及の「キャメル・ソーン」は前者で、*Alhagi maurorum*（別称 *A. mannifera* あるいは *A. camelorum*）という学名の植物である。ヨーロッパ～西アジア～中央アジアに自然分布し、またアメリカやオーストラリアにも分布を広げている。畑の雑草として侵入したらしく、Camel thorn bush とも呼ばれる。鋭いトゲを持ち、赤い花、赤い実をつけ、シリア、レバノン、トルコ、イラン、イラク、アフガニスタンなどに分布している。

Alhagi maurorum に限らず、Alhagi はすべて Camel thorn と呼ぶことがある。

いまひとつの *Acacia* 属は、南アフリカ原産の *Acacia erioloba* という高木で、その分布はアフリカ南西部に限られる[10]。

「キャメル・ソーン」に関して松本清張はその著「砂漠の塩」の終盤「駱駝(らくだ)の刺(とげ)」および「終章」（1982年９月25日発行　新潮文庫初版、下記引用文末カッコ内は当該書所収頁）において、心中場所と決意して砂漠を彷徨う男女の前に現れる植物として著している：

■砂漠にも眼に見えない湿地帯があるとみえて矮小(わいしょう)な灌木(かんぼく)が生えている。せいぜい一メートル足らずの長さで、茎だけで出来ているようなオリーヴ色の植物だった。英語で駱駝(キャメル・ソーン)の刺と呼ばれている。地下の少しの湿潤でも探し当てて長い根で貪欲(どんよく)に水分を吸って生きている、硬い茎を持っていた。（293～294頁）

■アミジワジは全くの涸谷(かれだに)ではない。雨季になると水が溜まり、（中略）キャメル・ソーンのほかに、日本のシャクナゲの葉にも似た低い、そして横に枝を広げた灌木の密生や、ずっと柔らかい草地さえある（303頁）

■キャメル・ソーンは薪にはいいが、これを採集するとなると、その鋭い刺が皮膚を刺す。（304頁）

■恋人の埋まっている砂漠の国から立ち去りがたいようであった。彼女は、再び、花の代りに立てたキャメル・ソーンの砂の上に戻って行く覚悟にもみえた。（307～308頁）

「風紋」は、この「キャメル・ソーン」（*Alhagi maurorum*）由来成分を含有すると謳う健康食品「キャメラミン」が会社を急成長させ、しかしやがて「キャメル・ソーン」由来成分が社内外諸問題惹起の因となるうちに物語進行する。すなわち、物語要所において、まさに先述の「考古学」の如く「キャメル・ソーン」への言及が見られる：

1 (『経営者十傑』より)《あれは何だと店主にきいたら、「駱駝の茨(らくだ いばら)」だという。英語名 Camel Thorn。サハラやアラビアの砂漠に生えている灌木の一種。雨が降らなくても、附近に沼沢が無くとも、一年中、乾上(ひあ)がった砂の中に生命力を保っている植物である。これはラクダだけが食べる。ほかの動物は食べない。ラクダが砂漠に強いのは、これを食うからだろう。主人はそう答えた。(中略) 砂漠の植物。いい幻想を人に与えそうであった。灼熱の砂漠に強い駱駝の秘密がこの灌木にありそうだった。砂漠を行く駱駝、ロマンチックであった。日本人の心をそそりそうであった。》(13頁下)

2 (『経営者十傑』より)《杠忠造はすぐにベイルートに飛行機でとんだ。車で、シリア、イラクの旅がはじまった。(中略) 彼の頭の中は「駱駝のいばら」でいっぱいだった。(中略) 眼に見えるものは茶褐色の砂漠のところどころに群生している棘(とげ)のある矮小(わいしょう)な緑色のキャメル・ソーンだけだ。忠造に従う者は現専務の島田ただ一人。忠造、このとき四十七歳。(後略)》(14頁上)

3 (『経営者十傑』より)《彼はまずベイルートの日本大使館に行き、そこで現地の貿易商を紹介してもらった。(中略) 忠造はブリングハム (=現地の貿易商、筆者註) に、もし、自分がこれ(=キャメル・ソーン、筆者註)を必要とするときは、大量に砂漠から刈取って乾燥した上、できるだけ早く日本に送ってくれ、と頼んだ。(中略) 中近東など、日本からオイソレと行けるわけはない。(後略)》(21頁下)

4 (『経営者十傑』より)《……キャメル・ソーンから、そのエキスの抽出に成功し、その大量生産化の見通しがついたとき、次に杠忠造の頭を悩ましたのは、その商品名である。(中略)キャメル・ソーンは土俗語でヤンタクと呼ぶ。(中略)杠としてはキャメルという名前に未練があった。(中略) あの広漠とした砂漠の涯に真赤に沈む太陽を見て、思わず灼けた地にひれ伏した感激は、駱駝とは切っても切れない印象である (後略)》(25頁下－26頁上)

5 (『経営者十傑』より)《広い砂漠の涸(か)れ谷に点々と散在しているキャメル・ソーンの群れ (後略)》(36頁上)

6 (今津の日記より)「キャメラミン」の原料が砂漠に生きる駱駝の食う草というところから、いわば、これはヨーロッパの漢方薬だというイメージづくりをした。(中略) 日本人は昔から砂漠に対して一種の夢を持っている、ロマン性を感じている (と社長は云ったという、筆者註) (42頁上)

7 (栄養学が専門の吉村の言)あの宣伝文句にある通り、キャメル・ソーンは砂漠地帯の乾き切った砂の下のわずかな水脈から水分を吸上げて生きている矮小(わいしょう)な植物です (63頁上)

8 (栄養学が専門の吉村の言) 手を回してアラビアからキャメル・ソーンを取寄せました。ところが、キャメル・ソーンにはそんな抽出不可能といった栄養素はないんです。全くこれはない。駱駝が砂漠に強いのはキャメル・ソーンを食べているからではなく、全然ほかの理由からです。(63頁下)

9 キャメラミンは、うちの社長と専務が原料のキャメル・ソーンをアラビアから持ち帰って、薬学の権威でいらっしゃる仁田博士に研究をお願いしたのです。(64頁下)

10 『経営者十傑・杠忠造伝』の筆によれば、杠と島田はキャメラミンを創り出すため二人でアラビアの砂漠を歩いたが、キャメル・ソーンを採取するとき、砂漠に沈む夕日を眺めた杠が、《君、この光景を眼から忘れないでおけよ。日本に帰ってぜひ、これを新製品のイメージにもりこむのだ》と島田に感激して叫ぶ場面がある。(85頁上)

11 (今津の「私」への説明)『経営者十傑』には、二人がアラビアに行ってキャメル・ソーンを採取するところが感激的に書かれてありますね。(112頁下)

Ⅵ. ベイルート経由シリア、イラクへの旅

前章引用文中のうち、とりわけ 2 は意味を持つと思われる。それは、「キャメル・ソーン」を求めて創業者たちが西アジアの砂漠地へ初めて出かけた時の様であり、松本清張自身あるいは作家の視座を示唆しているのではないか、とも読むことができるのではないかと考えられるからである。

たとえば、具体的訪問地としてベイルートを先ず挙げていることもさることながら、これがいったいいつの事という設定になっているかに注意したい。物語中の「明治四十二年生れの社長杠(ゆずりは)忠造」(『全集』 6 頁下)に依拠すれば、このベイルート経由シリア、イラクへの旅は「忠造、このとき四十七歳」(『全集』14頁上)とあるから、1909(=明治42)+47=1956(昭和31)と算定できる。

「風紋」におけるキャメル・ソーン採取目的のための西アジア行の設定年「1956年」、それは日本の考古学界がはじめて西アジアの古代遺跡の発掘調査に着手した年であった。東京大学あるいは東洋文化研究所(東京大学)の HP は以下のように開示している:

■「1956年に東京大学は、イラクとイラン両国へ発掘調査隊を派遣した。これは第 2 次世界大戦後、海外で実施された本格的な学術調査の嚆矢となるものであった。」(http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/1997DM/chapter3/0315.html)

■「イラクイラン遺跡調査団出発　記事番号:01828　年月:1956年09月
メソポタミアを中心に古代遺跡の発掘調査を行う東京大学イラク・イラン遺跡調査団の本隊新、高井両副団長ら一〇名は七日出発した。一行は六月先発した江上団長ら五名とテヘランで合流し現地の調査を行う。」(http://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi/2800.html)

また、この物語の時代設定はいつか?それは、「社長は今年六十三歳になる」および「明治四十二年生れの社長杠忠造」という文中記載事項を根拠に算出できる。すなわち、「今年六十三歳」を満年齢とすれば、「明治四十二年」は1909年であるから、小説「風紋」の初出は1967[昭和42]〜1968[昭和43]年ながら、物語の時代設定は1972(昭和47)年と見なし得るであろう。社長が「明治四十二年生れ」であることは松本清張の誕生年と同じである。また、松本清張の佐賀への拘りの好例のひとつと見做すべきであろうか、この「社長杠忠造」は佐賀出身という設定になっている(カッコ内は『全集』(文藝春秋)中の所収頁と上あるいは下段):

■「もっとも杠という姓は肥前にある。社長も佐賀県出身だった」（6頁上段）
■「杠（ゆずりは）忠造は蓮池（はすいけ）という小さな町に生れた。小藩だが、士族の家柄である。」

これらの年代設定は偶然か作為か？先述の「明治四十二年生れの社長杠忠造」、「社長も佐賀県出身」、そしてなにより、考古学要素の頻出等々を勘案すれば、「1956（昭和31）」年はこの作家ならではの周到な作為と考えざるを得ない。

むすびにかえて：松本清張作品の西アジアへの広がりと具体化の背景

松本清張が1964（昭和39）、1965（昭和40）の西アジア現地訪問以降、当該地を「ベイルート情報」、「砂漠の塩」そして以降の諸作品の多くに具体化していったのはなぜか。「風紋」は、著者本人を想起させる筆致を諸処に含みもつことが、このことを考えさせる端緒を提供してくれているように思われる。発表作品を年譜的に観れば「考古学」への強い傾倒に「西アジア」が付加されていったようでもあるが、それはたまたま後発というだけで、「西アジア」もまた早い時期から松本清張の中に将来への萌芽として確かに有ったと考えたい。それはなぜか。

ひとつは映画『眼には眼を』からの影響があるようである。これについて松本清張は次のように語っている[11]：

■戦後の洋画で印象に残るのを一つだけ挙げよといわれたら、アンドレ・カイヤットの「眼には眼を」（日本では一九五八年に上映）の名を提出する。（156頁）
■わたしはこの映画が忘れられず、ベイルートに行ったときダマスカスを訪れた。バールベックのある高原から西、ダマスカス街道を下ってゆくと、（後略）（157頁）
■イランには二度行ったが、初度（＝1965年、筆者注）にはヤズド市外のダフメ（鳥葬の場）のまわりの砂漠を、現地人と二人で歩いた。（中略、映画登場人物になったような気分になり）同行の案内人に、これを持参の八ミリで撮影してもらった。（159頁）
■次のイラン再訪（＝1973年、筆者注）では、（中略）途中で道に迷い、砂漠に入ってしまった。この時もカメラを水谷君（＝同行者、筆者注）に托し、車を下りて砂漠を歩く「医師ヴァルテル」（＝映画「眼には眼を」の主人公、筆者注）のわたしの姿を撮ってもらった。（159頁）
■これほどまでにわたしの心に強い印象を残した映画はほかにない。拙作「砂漠の塩」では、映画とは場面が違うが、これに似た情景を挿入している。（159頁）

いまひとつとして、当該地あるいは「砂漠」を文学作品にはやくに採り入れた先行作家二人に留意したい。

ひとりは、井上靖（1907～1991年）である。井上靖は、はやくに下記のような西アジアを舞台とするいわゆる「シルクロードもの」、「西域もの」を発表し独自の世界を生み出している：

・「漆胡樽」（1950年4月号『新潮』掲載）

・「玉碗記」（1951年８月『文藝春秋』掲載）
・「古い文字」（1962［昭和37］年12月１日「文學界」12月号（第16巻第12号）および1964［昭和39］年６月１日発行の同誌６月号（第18巻第６号）に分載発表）

そして、松本清張をして下記のように語らしめている：

■「私は井上靖氏の出現がなかったら、何を目標にして作品を書いていいかわからなかった。井上氏によって私の行く道は決定したと言ってもよい。」（『青のある断層』（松本清張短編全集２、光文社、1963年12月15日初版）所収「あとがき」）

いまひとりは岩下俊作（1906～1980年）である。岩下俊作は、早くに長編「西域記」[12]を発表し、いわゆる西域砂漠地帯を著した。これは「シルクロード」を題材とした小説のさきがけとも評し得る佳作である。この岩下俊作との関わりについては、下記のような、刮目にすべき記録[13]を読むことができるが、これについては稿を改めたい：

■岩下氏と自分とは小倉にて昭和二十五年より三年間の交際である。江南町の岩下宅に行き、自分はノートに書いた小説の下書きを朗読して聞かせ、彼の感想を求めること一再でなかった。（中略）ある晩、ノートに書いた「或る『小倉日記』伝」を朗読したところ、「文学的な作品にしようとして最も悪いところが出ている」との岩下評が印象に残る。

■彼は自分の天神島小学校時代の同級生八田ケンチャンの兄で、本名八田秀吉。その家は馬借（ばしゃく）町の人力車業であり、いわゆる俥（くるま）の立場（たてば）であった。その俥夫（しゃふ）の生活を見てきて発想を得たのが「富島松五郎伝」（映画化されて『無法松の一生』）である。

【註】

1．郷原宏　2005 『松本清張事典　決定版』　角川書店
2．大津忠彦　2005 「「松本清張作品にみる「考古学」」『小説に読む考古学　松本清張文学と中近東』（大津忠彦編）　15～21頁　中近東文化センター
3．大津忠彦　2009 「小説『内海の輪』に読む考古学」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第４号　95～107頁
　大津忠彦　2014 「松本清張著『鴎外の婢』にみられる考古学的虚実構成」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第９号　95～107頁
　大津忠彦　2014 「松本清張文学にみる「添景」としての考古学」『東アジア古文化論攷Ⅰ現代と考古学』（髙倉洋彰編）　65～81頁　中国書店
4．「朝日新聞」（西部本社版）夕刊掲載シリーズ「小倉時代の松本清張（12）」（取材・執筆は編集委員（当時）小林慎也）1981（昭和56）年４月10日付）
5．大津忠彦　2013 「松本清張文学作品における「考古学もの」への契機・始動と昇華」『福岡大学考古学論集２』455～468頁　福岡大学考古学研究室
6．松本清張　2008 「［全集・単行本未収録］国際推理作家会議で考えたこと－ネオ「本格派」小説を提唱する」『松本清張研究』第９号所収（初出は『文藝春秋』1988年１月号））
7．（シリーズ「わが小説」第14回目：1961（昭和36）年11月17日付「朝日新聞」（東京版）朝刊、1961（昭和36）年11月18日付「朝日新聞」（大阪版）朝刊）

8．『東海大学校地内遺跡調査団報告』 9・10、2001年2月、125～142頁
9．古沢安二郎訳、新潮社版、1959年4月5日発行、第Ⅷ章「砂漠の港ダマスカス」（引用箇所は同書169頁上段）
10. 中村徹氏（元筑波大学教授、乾燥地植物生態学）の御教示に拠る。
11. キネマ旬報社編『私の一本の映画①』1982年11月30日初版、1996年1月10日新装版初版、156～159頁 引用文の収録資料参照に関しては、北九州市立松本清張記念館の小野芳美氏の御協力を得た。
12. 『九州文学』1940年9月号～1946年9月号、連載中に第17回（1943年上半期）芥川賞候補
13.「清張日記」『松本清張全集』65（文藝春秋）1996年 「昭和五十五年　一　一月三十日(水)」（137～138頁）

（おおつ　ただひこ：アジア文化学科　教授）